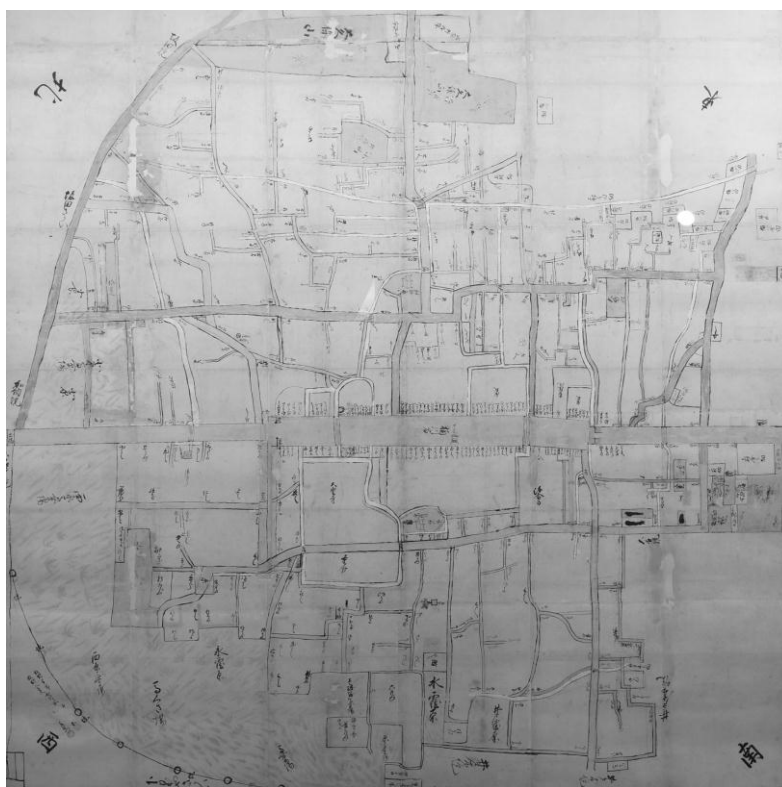


資料解説講座 2015年12月13日

桶川宿古絵図と宿場模型

ご案内 桶川市歴史民俗資料館
館長 橋本富夫



本日の講座では、元禄時代に描かれたと推測される「桶川宿古絵図」（府川家文書）と幕末の桶川宿の姿を再現した、展示資料「桶川宿宿場模型」をもとに、江戸時代の中山道桶川宿の姿を知り、また、町の成長に思いをはせてみましょう。

1. 桶川宿の沿革

中山道の江戸から6番目の宿場にあたる桶川宿の沿革の詳細は不明である。

桶川宿本陣府川家より幕府代官に提出された同家の由緒書には、先祖である大野秀利が天正年間に浪人し、当所に来住することになり、その後、2代目の当主が府川甚右衛門と改名し、寛永年間に本陣並びに問屋名主役を勤めることとなったと記されている。

また、宿内の浄念寺境内にある正徳年間（1711～1715）に立てられた「薬師如来聖徳太子作」と刻まれている灯籠を兼ねる供養塔には、西尾隠岐守吉次の没年である慶長 11 年（1606）の年号とともに「当駅開闢西尾隠岐守」との文字が見られ、西尾氏の支配のもとで宿が開かれたことを伝えている。

〔開設当初の宿場〕

宿の開設当初に近い、寛永年間の家数 58 軒は、桶川宿が負っていた馬 50 匹、人足 50 人の伝馬役との関係が指摘される。この当時の町並みは、伝馬の課役を負う街道沿いの農村といったものであったとおもわれる。

当時の宿場の姿を旅人の目から見た資料として、豊後国岡城主の妻が著した旅日記である『伊香保記』がある。この日記では、田舎びた宿の姿が記されている。

「むさしとて そのぬけとおる おけ川に しはしととむる とはうるさし」

参考資料 「江戸図屏風」に描かれた鴻巣宿



〔確立期の宿場〕

その後、近世村の確立期にあたるといわれる寛文年間には、当初に比べ戸数は倍増し、さらに 18 世紀半ばの宝暦 5 年（1755）には、家数は 260 軒、人口は 1112 人に達している。同年の『桶川宿高反別並諸品書上帳』には、「耕作の間...茶屋駄賃取小揚取等致し候外稼御座無候」と記され、未だ農業を主な生業にしながら、往来する人々の荷駄の継ぎ立てを副業にする宿場の姿をうかがうことができる。

歴史民俗資料館の常設展示で紹介する「桶川宿古絵図」は、元禄年間に描かれたとされ、確立期の宿場の姿を教えてくれる。

2. 桶川宿古絵図

(1) 概要

この絵図は、本陣職を務めた府川家に伝えられたもので、桶川宿を描く絵図としては最大のものである。

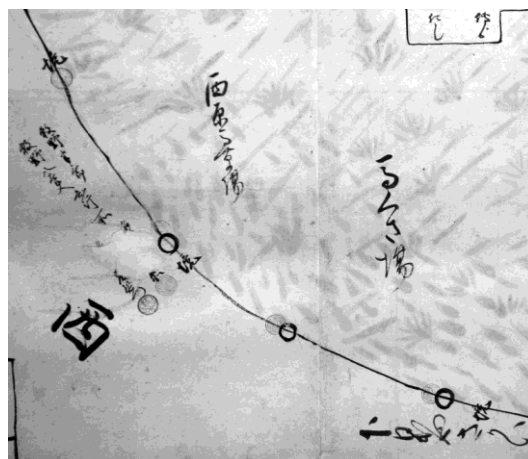
絵図の北は「坂田境」「加納境」、中山道に沿っては「下石戸境」、西は「下日出や（谷）さかい」、南は「井戸木境」「大谷境」と村境が記され、東は上村（上尾市）と桶川宿の耕地が入り組む様子が克明に記されている。

また、西側には「西原馬草場」「馬くさ場」の表記があり、牧野八太夫、牧野半三郎知行所と記された箇所には、名手二名が署名の上、境に加判がなされている。

(2) 作成の背景—まぐさ場争論—

この絵図は、元禄年間（1688～1704）に多発した、いわゆる秣場（まぐさば）争論（そうろん）を背景に作成されたものと推測される。

秣場争論とは、江戸時代前期に盛んに行われた新田開発によって縮小した林野の用益を巡って、隣接する村々が争ったものである。当時、林野は、馬の飼料を得ることばかりではなく、燃料や建築資材の確保、さらには田畑の地力を保つ緑肥となる草を刈り取るなど、村の生活に欠くことのできないものであった。



(3) 宿場の姿

絵図の中央には中山道が通り、宿の入口には明確に木戸が描かれ、宿の中央には御高札との表記がある。また、中山道を横切る橋の両脇には一里塚が描かれている。

寺社については、街道の南側に大雲寺（曹洞宗）と浄念寺（浄土宗）、白山権現と神明宮が描かれ、北側には南蔵院（修験）と「いなり大明神」が描かれている。また、向かって左方向、上の木戸の外側には「観音堂」が描かれ、宿の南側、水窪原の近くには「若宮」の表記を見ることができる。

これらの寺社の中で、現在も所在を保っているのは大雲寺と浄念寺、そしていなり明神（稲荷神社）のみである。

※別図を参照のこと

3. 宿村から町へ 「中山道分間延絵図」に描かれた町並み

寛政 12 年(1800)『桶川宿分間延絵図仕立御用宿方明細書上帳』には、以下のように記され、当時の家数 247 軒の内、83 軒が旅宿あるいは農産物取引などの商業に従事していたことがうかがわれる。

「宿内泊食其外諸商人八拾三軒」

寛政 10 年の大火後に描かれたと考えられる『中山道分間延絵図』に見える桶川宿の町並みには、周辺の他の宿場に比べ、瓦葺き平入りの町屋が多く見られるようになっている。

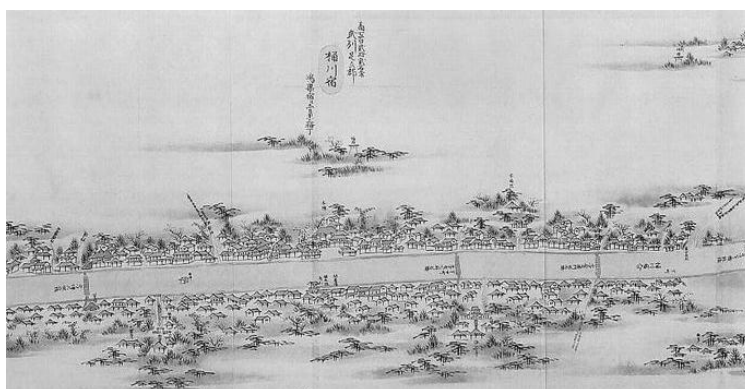
このことは、災害からの復興を遂げる中で、桶川宿が、農業のかたわら往還の稼ぎ（旅籠 馬方など）を営む宿村から、近郷から紅花や麦などの産物を商う在郷町へと宿場の性格が変わっていったことと無縁ではないだろう。

参考 宿勢の推移

暦年	寛永 2 年 (1625)	寛文 11 年 (1671)	宝暦 5 年 (1755)	寛政 12 年 (1800)	文化 2 年 (1805)	天保 14 年 (1843)	嘉永 2 年 (1849)	慶応 2 年 (1866)
家数	58	106	260	247	255	347	355	358
人口		405	1112	1049	1063	1444	1511	1620

絵図は寛政 12 年（1800）幕府の命令により、道中奉行が作成した 91 巻に及ぶ測量絵図の「桶川宿」の部分である。

五街道（東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道）のほかに、伊勢路・足尾道などの脇街道を含む。1/1800 の縮尺で作成され、特に宿駅の本陣・脇本陣・社寺・家屋の屋根や、街道の一里塚や橋なども詳細に描いてあり、当時の街道の様子をよく伝えている。



4. 桶川宿宿場模型について

地形や地割：明治 9 年 「地租改正地引絵図」をもとにした

建物の復元：文久元年 「和宮下向宿割書上」所収の平面図を資料とした

建物の外観：昭和 30 年代撮影の山本豊三郎氏撮影の写真を活用した

その他：各地割りごとに住人のデータベースを作成した